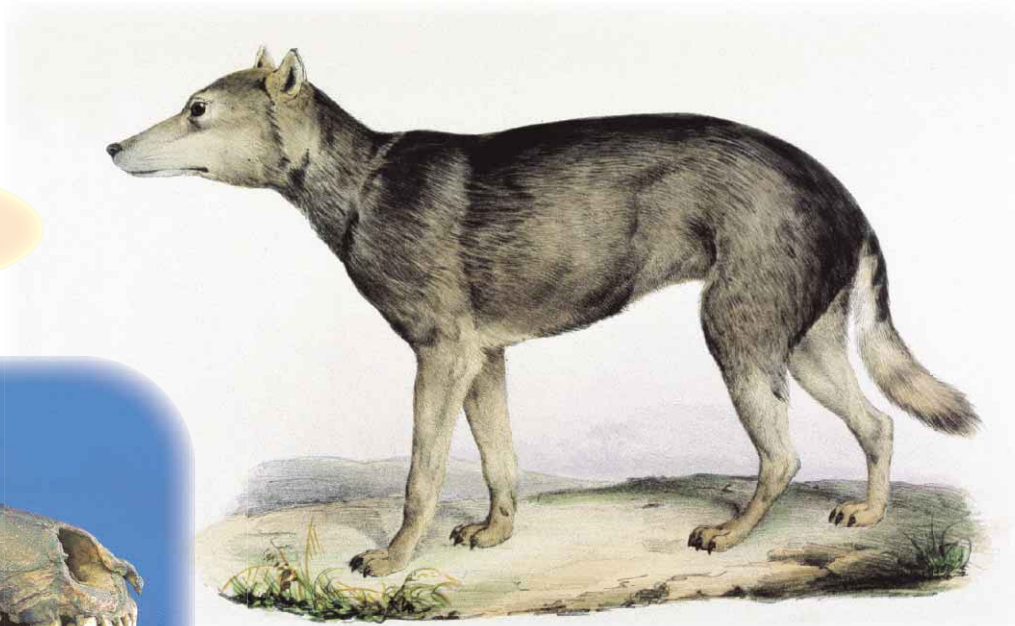


博物館

ニュース

ニホンオオカミ



上：シーボルト「日本動物誌」に掲載されたニホンオオカミの図（徳島県立博物館蔵）

左：徳島県美馬市の民家に伝わるニホンオオカミとされる頭骨（徳島県立博物館保管）

かつて日本には2種のオオカミが生息していました。北海道にいたエゾオオカミと本州・四国・九州にいたニホンオオカミです。エゾオオカミは1896年（明治29年）、ニホンオオカミは1905年（明治38年）の捕獲記録が最後です。ただし、ニホンオオカミの場合は研究がなされる以前に絶滅してしまったため、その分類学的・生物学の実態はよくわかっていません。

絶滅の原因にしても、エゾオオカミではわかっていますが、ニホンオオカミではよくわかっていません。エゾオオカミは、北海道開拓を進めるうえで、家畜などに被害をもたらす邪魔者として駆除されました。しかしそれだけでなく、明治期に持ち込まれたジステンパー・ウイルスによる感染

も大きな影響を与えたのではないかとわれています。ニホンオオカミもほぼ同時期に絶滅しますので、やはり同様の原因だったのではないのでしょうか。

さて、徳島県にもニホンオオカミが生息していたらしいことがわかっています（写真-左）。四国では他に高知県仁淀村の民家にも、ニホンオオカミとされる頭骨が保存されていることがわかっています。同様の例は日本各地にあり、例えば、神奈川県たんだわの丹沢地方では23個もの頭骨が確認されています。これらの多くは民間信仰に關係して伝えられてきたものです。

ニホンオオカミは、企画展「絶滅」で紹介します。
（動物担当：佐藤陽一）

「保存する」ということ

魚島 純一



はじめに

博物館の仕事のひとつに、資料の保存というのがあります。博物館の根幹をなす仕事と言っても過言ではありません。博物館でさまざまな資料の保存に携わってきて、人よりも多く「保存する」ということについて考える機会がありますが、最近、改めて「保存する」ことの難しさをつくづく感じています。

ここでは、いくつかの例をあげながら、「保存する」ということについて考えてみたいと思います。

文化財を「保存する」ということ

広辞苑によると、

【保存】もとの状態を保って失わないこと。
原状のままに維持すること。

とあります。また、例として「遺跡の保存」などが挙げられています。

誰でも知っているこのことばですが、改めて考えてみることにしましょう。

もとの状態を保つとのことですが、もとの状態とはどの時点のことでしょうか？博物館に持ち込まれる資料の多くは、すでに本来の役割を終えて、別の価値を見出されて持ち込まれるモノがほとんどです。博物館に持ち込まれた時点をもとの状態とするか、それらが本来の機能を有していたころをもとの状態とするのかで、大きな違いがあります。

文化財の修理や保存に携わる者が、まずはじめに教えられる大原則のひとつに、「現状保存」というのがあります。これは、今ある状態を変えずに残すことを大原則とするという理念です。「原状」とは同じ発音ですが意味が違います。

例えば、サビに覆われているモノは原則としてサビに覆われた状態を保存し、汚れてしまったモノは原則として汚れた状態で保存するという考えです。これは、その状態になるに至った過程にも歴史があり、それらの情報を修理に携わる者の判断だけで安易に消し去ってはいけないという戒めを含んでのことだと理解しています。文化財を保存するという場合には、単にモノとしての文化財を保存するだけでなく、そのモノが持っている

情報をも今ある状態のまま保存しなければならないのです。ですから、ただ置いておくだけではなく、その情報を引き出せるようにすることも大事なことになります。

これは決して誰にでもできることではなく、そのために博物館などの公的機関がその役目を担ってきたわけです。

文化的なことというのは、往々にして即時的な生産性がなく、一見すると無駄なことのようにも思えたりしますが、それを継続できるかどうかはその文化を所有する集団のほんとうの価値ではないのかと思います。欧米ではこのような考え方がほんとうに広く浸透しているようですが、さて、わが国ではいかがでしょうか？

数年前、外務省の招聘で研修にやってきた途上国の博物館担当者が言っていたことばが、今でも私の耳の奥にこびりついています。「歴史や文化をおろそかにする国は必ず滅びます。」

昨今、財政的な理由などから博物館不要論まで飛び出したりしていますが、発展途上なのは、ひょっとすると私たちの方なのかも知れません。

「保存」その理想と現実

保存の理想は、今ある状態を変えずにそのまま残すことであるのは言うまでもないことです。しかし、これはあくまでも理想であって、現実にはそうはいきません。

形あるものはいずれは崩れるの例えどおり、この世の中に劣化しないものなどないのです。つまり、「保存する」ということは、その劣化のスピードをできるだけ遅くすることに他ならないのです。

中には、材質上や形態上、保存できないモノ、保存することが極めて困難なモノ、保存することを一切考えていないモノもあります。

最近、新聞紙上などで壁画古墳の保存についての報道が多く見られます。さまざまな立場の人がさまざまな見解を持っていることと思います。それらについてここで議論することは控えますが、ひとつ思うことがあります。あの例は、発見され

たこと、すなわち現代まで残ったこと自体が奇跡ともいえることなのに、それを保存することなどそれほど容易ではないということです。

たしかに、多くの努力と最新の技術、莫大な費用を使って保存が試みられたにも関わらず、結果はうまくいかなかったと言えるでしょう。しかし、あの保存方法が完全に間違っていたとは考えられないのです。なぜなら、その時点で考えられる最高の技術を使って、最善の処置がとられたに違いないと信じるからです。

保存しなくていいモノ？

博物館が資料として保存するモノは何もいわゆる文化財と呼ばれるようなモノばかりとは限りません。近年は文化財の範疇も広げて理解される傾向がありますが、それでも文化財と考えるにくいようなモノも多くあります。

時々、なぜそのようなモノまで保存するのかという声をお聞きすることもあります。答えは簡単です。「今保存しておかなければ、なくなってしまうから」です。

当然のことですが、今私たちが目にすることができるモノは、今残っているモノだけです。博物館に保存されるモノはその中でも特別な価値が見出されたり、偶然にも見つけられたりして、何らかの理由で持ち込まれたモノだけです。これらの陰には、不幸にも残ることができなかった多くのモノたちがあることを忘れてはいけません。そして、私たちが過去を考え、知ることができるのも、残ったモノからだけであることも承知しておかなければなりません。一度失ったモノは取り戻すことはできません。

最近、自分が生まれ育ったころに見かけたモノが無性になつかしくなり、思い出しながらコレク

ションをはじめました。いざ探しはじめてみると、つい最近までごく普通にあったと思うモノでも、なかなか見つけられないことがあることに気付きます。たった30～40年ほど前のモノでも、すでに残っていない場合もあります。私たちにとっては単になつかしむことができなくなるだけですが、ほんとうにこのままでいいのかと思います。

今の私たちの日常生活の中で見られる多くのモノは、やがて姿を消し、いつかは歴史の中のモノになるわけですが、現在のような大量生産、大量消費の社会の仕組みの中では、ほとんど何も残らないのではないかと心配します。例えば100年、200年後の人びとが私たちがくらした時代について調べようとした時、いったい何を手がかりに調べるのでしょうか。

モノは役割がなくなると存在しなくなります。つまり、要らなくなったモノや使わなくなったモノは捨てられるということです。しかし、どんなに古いモノでも、どんなに汚いモノであっても、新たな役割を与えられたモノは、またそこから新たな存在意義を持ちはじめます。保存しなくていいなんて私たちが決めてしまってもいいのでしょうか？ 私たちには、モノに新たな役割を与えることもできるのです。

博物館に保存されているモノを見るにつけ感じることがあります。それはいつかの時点で、誰かが、残そうとしたモノが残ってきたのであって、残そうとしなかったモノは残らないということです。つまり、残さなくていいモノなんて何もないのです。文化財の保存に携わる者が教わる大原則にこんなこともあります。「モノに優劣はない。」

できるだけ多くのモノとそれらが持つ情報を、少しでもよい状態で「保存」し、次の世代、またその次の世代に伝えていくために、できる限りの努力をしなければならぬと、改めて感じています。

(保存科学担当)



どこの家庭にでもあったモノもいざ探すとすでになくなってしまっていることも…。

(後列左から：踏み台(くず入れ)・黒電話・置き薬の箱、前列左から：殺虫剤のスプレー・置き薬の紙袋)

キュウシュウエゾゼミ

徳島県には、ハルゼミ、ヒメハルゼミ、エゾハルゼミ、ニイニイゼミ、アブラゼミ、クマゼミ、ミンミンゼミ、ヒグラシ、ツクツクボウシ、チツチゼミ、エゾゼミ、コエゾゼミ、アカエゾゼミ、キュウシュウエゾゼミの14種のセミが生息しています。

ではその中で一番珍しいのはどの種ですか？と聞かれたら、「キュウシュウエゾゼミです」と答えることになるでしょう。

キュウシュウエゾゼミは、九州の大分県久住山系などには多いのですが、四国では愛媛・高知・徳島県の一部、あと中国地方の山口・広島県の一部にも分布しています。

このセミは、徳島県ではこれまでわずかに3頭しか採集記録がありません。もともとエゾゼミのなかまは山地性で、標高700m～1200mくらい（もう少し低い山でも分布することもある）までにエゾゼミが、1000～1200mくらいにアカエゾゼミが見られます。標高的には重なりますが、基本的にエゾゼミは針葉樹（スギ、モミなど）などによく止まるために、植林地でも見られます。しかし、アカエゾゼミは広葉樹が無いとまったく見られません。今のところ、アカエゾゼミが多いのは祖谷溪の広葉樹の多い谷筋だけといえそうです。これよりも標高が高くなって1300mを越えると、まずほとんどがコエゾゼミと考えてもいいでしょう。

エゾゼミ類は高い木に止まることが多いために、一度にたくさんの個体がとれるということもありません。また、ほかのセミと違って、鳴き声がどれもよく似ており、鳴き声だけではどの種であるかを判断することができないこともこのなかまの記録が少ない原因でもあります。

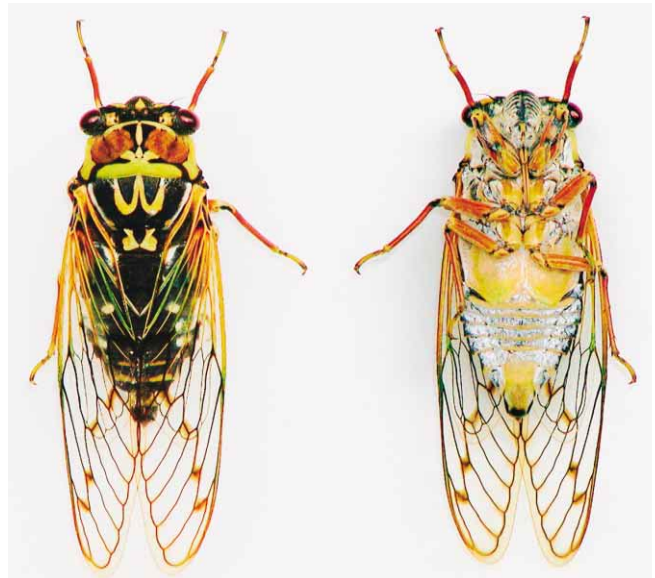
キュウシュウエゾゼミは、徳島県がこのセミの分布の東の端にあたることもあってか、30年～40年ほど前に東祖谷山村落合峠付近、木頭村石立山、それに剣山富士ノ池で得られたとされているだけです。残っている標本は当館に所蔵されている東祖谷山村落合峠での1頭のオスだけでした。当館では、エゾゼミ類に重点を置いた調査を行い、本種が採集されたこれら3カ所を調査しましたが、

本種は発見できず、今も生息しているのかどうかまったく情報のないセミでした。

ところが、2004年になって、日本セミの会員で京都市の今井博之さんから、「剣山の見ノ越で採集されたキュウシュウエゾゼミがある」という情報をいただきました。お話を伺うと、実際にこのセミを採集したのは徳島市の方で、ご本人はコエゾゼミと思ったようだというのです。確かに標高が1400mもある見ノ越で採れたということ、それがコエゾゼミと思ったとしても不思議ではありません。標本は2003年7月16日、見ノ越の駐車場に落ちていたものを徳島市の増田敏雄氏が拾った個体でした。今井さんは、このいきさつを日本セミの会の会報に報告したのち、標本を当館へ寄贈していただきました。これが徳島県のキュウシュウエゾゼミの4番目の記録となりました。さらに、四国のほかの場所ではコエゾゼミとは標高や場所を違えて棲み分けしているとされていたのですが、徳島県ではコエゾゼミと同じような場所に、同所的に生息している可能性が高いということを示してくれた貴重な標本でもあります。

貴重な標本を当館にご寄贈下さった今井博之さんに心から感謝申し上げます。

（昆虫担当：大原賢二）



背面

腹面

キュウシュウエゾゼミ ♂

絶滅 — 生きものはなぜ滅びるのか？

生物は、約40億年前にこの地球上に誕生してから今日まで、多様性を増やしてきました。しかしそれは決して順調な歩みではなく、絶えざる誕生と絶滅の繰り返しでもありました。絶滅の原因は様々です。地質時代に起こった大規模な火山噴火や隕石の衝突に伴う環境の激変といった天変地異だけでなく、もっと小規模で緩やかな環境の変化や生物どうしの関係の変化によっても起こります。また、人類が誕生してからは、多くの生物を絶滅させてきたと考えられます。その傾向は時代を経るに従ってますます強まり、現在では世界規模での対策が求められるようになってきました。

この企画展では、地質時代の絶滅から現代の絶滅までを取り上げると共に、現在、絶滅の危機にさらされているレッドデータ生物を多く取り上げ、生物の絶滅について考えます。



イグアノドンの頭骨
(白亜紀、モンゴル)



マンモスの下顎(北海海底)
ほとんどが1万数千年前に絶滅。
人間による狩猟が一因とも考えられている。

会期 平成17年7月22日(金)～8月31日(水)
会場 博物館企画展示室
観覧料 一般200円、大学生100円、
高校生以下は無料
※20名以上の団体は2割引、
65歳以上は半額

展示構成

- (1) 絶滅とは？
- (2) 地質時代の絶滅
- (3) 生きていた化石
- (4) 絶滅のおそれのある生きものたち
- (5) 野生生物を絶滅から救う営み

企画展関連行事

- 企画展示解説
日時：7月24日(日)／7月31日(日)
午後2時～2時30分
- ミュージウムトーク
「滅びゆく魚たち」
日時：8月27日(土) 午後1時30分～3時
講師：佐藤陽一(徳島県立博物館)
会場：博物館講座室(3階)



トキ 日本産の個体群は
2003年に絶滅した。



フジバカマ 秋の七草の一つ。絶滅
危惧Ⅰ類(国)、絶滅危惧Ⅱ類(徳島県)。



ルイスハンミョウ 砂浜に生息し、
近年、減少が心配されている。
絶滅危惧Ⅱ類(国)。



ヒラテテナガエビ(井手口佳子氏撮影)
準絶滅危惧種(徳島県)。

標本交換:オレゴンの花がやってきた♪

徳島県立博物館では、研究や展示、普及といった様々な活動に活用するために国内外の大学・博物館などと標本交換をしています。標本交換とは、徳島県内などで採集した標本を他の地域の大学・博物館などとの間で交換することです。

ところで、標本を交換すると一体どんなよいことがあるのでしょうか？一つ面白い例がありますのでご紹介しましょう。ある早春のこと、北海道からやってきた植物にくわしい友達と道を歩いていました。すると彼がキランソウを見て、「こりゃ何だ？すごい綺麗な花だなあ！見たこと無いよ！」というのです。キランソウは徳島県では道ばたのありふれた草なので、ひょっとしてからかわれているのかなと思ったほどですが、なんと北海道には自生しないのだそうです。まさに“所変われば品変わる”ですね。こんなわけですから、お互いの地域の標本を交換すれば、それぞれ珍しい標本を手に入れることができるというわけです。また、同じ種の植物でも生育する地域が変わると形や大きさが微妙に変わってきます。このため、植物の変異を比較し研究をする場合には、いろいろな地域の標本を集めることが欠かせません。こんな時も標本を交換しておけばとても便利なのです。

さて、徳島県立博物館では現在、北海道大学、東北大学、福島大学そしてオレゴン州立大学と植物標本の交換を行っています。

以下では、特にオレゴン州立大学から届いた標本についてご紹介しましょう。

オレゴン州はアメリカ合衆国西部の州です。面積は本州と四国をあわせたほどの大きさで、海岸から高い山々までの多様な環境を備えた大変美しい所です。

これまでに何百点もの標本を交換してきましたが、さすがに太平洋を越えると、中には随分変わった植物も含まれています。

たとえば、ハゼリソウ科(Hydrophyllaceae)の植物(図1)。科とは、近縁な植物のなかまを集めたグループのこと。ほら、イヌ科とかネコ科とか言うのを聞いたことがあるでしょうか？このハゼリソウのなかまは、近年のDNAによる系統解析ではムラサキ科に近いとされ、世界に約250種が広く分布しますが、日本を含めたユーラシア大陸のほとんどには自生しません。

ガリア科(Garryaceae)の植物も日本には自生しないものです(図2)。この科は13種から成り、アメリカ合衆国西部～パナマ、ジャマイカにかけて分布します。花序が尾のように長い“尾状花序”であることからヤナギ科やヤマモモ科に近縁と考えられてきましたが、現在では、むしろ徳島県などにも見られるミズキ科のアオキなどに近縁だと考えられるようになってきました。

この他にもいろいろな珍しい植物の標本が交換によって当館に収蔵されてきています。今年の秋、このうち、ほんの一部ですがオレゴンの植物を展示する予定です。皆さんぜひご覧下さい。

(植物担当：茨木 靖)



図1 ハゼリソウ科の植物の標本



図2 ガリア科の植物の標本

&A クラゲ、サンゴ、イソギンチャクは同じグループなのに形が違って不思議です

しばしば生きものには同じグループなのに形がまったく違うことがあって驚かされます。こういうことがあるから自然観察はおもしろいのですね。そういうものの一つとして、ここでは刺胞動物をご紹介します。

クラゲ、サンゴ、イソギンチャク(図1、2、3)は形がそれぞれ違っていますが、いずれも刺胞動物というグループに含まれます。同じグループというからには何か共通の特徴を持っていると思われる。一つはグループの名のもとになっている刺胞と呼ばれる毒針を触手(図4)に持っていること



図1 ミドリイソギンチャク
徳島県鳴門市龍宮の磯



図2 アカクラゲ
徳島県鳴門市龍宮の磯



図3 ミドリイシの一種
(サンゴのなかま)

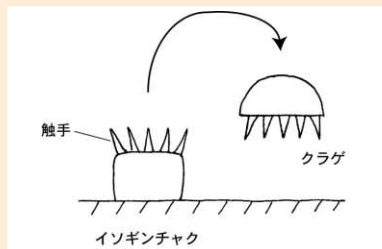


図4 イソギンチャクとクラゲ
イソギンチャクを岩から離して、ひっくり返すとクラゲになる。

ヌラと呼ばれ、これは岩などに付着し、そこで成長してまさにポリプと呼ばれるイソギンチャク形になります。ポリプが成長すると横に切れ目が入って、お皿を重ねたようなストロピラになります。そして、それぞれのお皿がはずれてエフィラとなり、それが成長してクラゲになります。このエフィラになるときに「イソギンチャクがひっくり返ってクラゲ」になっています。

では、サンゴはどうでしょうか。これは海中で生きて活動しているサンゴに近寄って見てみれば一目瞭然なのですが、普段私たちが見慣れている置物のサンゴ(図3)ではわかりません。図6-左は置物のサンゴを拡大したものです。小さな穴がたくさん開いていますが、実はサンゴが活着しているときはこの穴にイソギンチャクが一匹ずつ入っているのです(図6-右)。そう、サンゴとは小さなイソギンチャクの集合体なのです。置物のサンゴはイソギンチャクの部分を取り除いた骨格だけなため、イソギンチャクのイメージがわからないのです。

海の生きものには刺胞動物以外にも、ウニ、ナマコ、ヒトデなどが含まれる棘皮動物など形の違ったものが含まれるグループがあり、好奇心をかき立てられます。刺胞動物も棘皮動物も潮のひいた磯で手軽に観察できます。休みの日にでも、近くの磯で生物観察をしてみたいはかがでしょうか。

(動物担当：田辺 力)

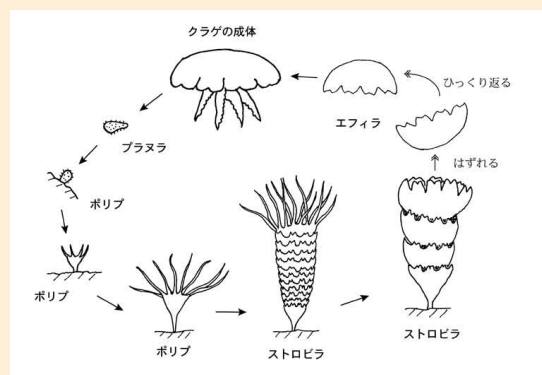


図5 クラゲの一生



図6 左：ミドリイシの一種(拡大)
写真の穴の一つ一つに小さなイソギンチャクが入っている。
右：生きて活動中の状態(イメージ図)

シリーズ名	行事名	実施日	実施時間	対象(人数)
歴史体験	「火おこし①」	7月18日(月)	10:00～12:00	小学生から一般(30)
	「戦時中の食事・すいとんをつくろう」	8月14日(日)	10:30～12:00	小学生から一般(35)
	「火おこし②」	8月21日(日)	10:00～12:00	小学生から一般(30)
	「勾玉をつくろう①」	9月4日(日)	13:30～16:00	小学生から一般(30)
野外自然かんさつ	「河口のいきもの」	7月10日(日)	13:30～15:30	小学生から一般(60)
	「水生昆虫のかんさつ」	7月30日(土)	10:00～12:00	小学生から一般(50)
	「漂着物をさがそう!」	7月31日(日)	9:00～17:30	小学生から一般(30)
	「川魚かんさつ」	8月20日(土)	10:00～12:00	小学生から一般(40)
	「鳴く虫のかんさつ」	9月10日(土)	19:00～21:00	小学生から一般(30)
	「白亜紀の地層を歩こう」	9月25日(日)	13:00～15:30	小学生から一般(25)
室内実習	「タングラムをつくろう」	7月17日(日)	13:30～15:30	小学生から一般(20)
	「かんたんな貝の標本のつくり方」	8月7日(日)	13:30～15:30	小学生から一般(30)
	「標本の名前を調べる会」	8月23日(火)	10:00～16:00	小学生から一般
	「シグソー地図を作ろう①」	9月18日(日)	10:30～12:00	小学生から一般(20)
	「ミクロの世界—電子顕微鏡で植物を見よう①」	9月25日(日)	13:30～15:30	小学生から一般(10)
みどりの工作隊	「花のTシャツをつくろう」	7月31日(日)	13:00～16:00	小学生から一般(10)
	「葉脈標本でしおりをつくろう」	8月28日(日)	13:00～16:00	小学生から一般(30)
ミュージアムトーク	「滅びゆく魚たち」	8月27日(土)	13:30～15:00	小学生から一般(50)
歴史文化講座	「銅鐸製作の技術」(海南文化館)	7月24日(日)	13:30～15:00	小学生から一般(50)
企画展関連行事	企画展「絶滅」展示解説①	7月24日(日)	14:00～14:30	小学生から一般
	企画展「絶滅」展示解説②	7月31日(日)	14:00～14:30	小学生から一般
その他	「夜の博物館ドキドキ体験ツアー」	8月6日(土)	19:30～21:30	小学生から一般(15)

◎ミュージアムトーク、歴史文化講座、企画展関連行事および「標本の名前を調べる会」は、申し込み不要です。
 その他の行事は、往復はがきでお申し込みください。(受付は、各行事の1カ月前から10日前必着でお願いします。)
 ◎小学生が参加する場合は、保護者同伴です。
 ◎企画関連行事は企画観覧料が必要です(小・中・高校生は無料)。その他の行事は無料です。

普及行事のお申し込みについて

往復はがきに

1. 参加希望行事名(1枚のはがきに1行事)
2. 参加希望者全員の氏名(保護者名と、児童・生徒の場合は学年も)
3. 住所
4. 電話番号

を記入し、行事の1カ月前から10日前までに必着で下記までお申し込みください。
 (午前・午後の2回行われる行事については、午前・午後の希望も書いてください。)

返信用はがきの住所・氏名も忘れずに記入しておいてください。

希望者が多数の場合は抽選し、詳しいことは当選された方にお知らせします。

原則として、参加費は無料です。



●申込先 〒770-8070 徳島市八万町向寺山 徳島県立博物館 普及係 TEL(088)668-3636